

脂質代謝改善治療の導入によって高ALPと臨床症状が改善された犬の4症例

○椿 直哉¹⁾ 一萬田正直¹⁾ 湯沢 綾¹⁾ 長谷川英公¹⁾ 佐山沙知¹⁾ 荒井延明²⁾

1) イオン動物病院相模原 2) スペクトラムラボジャパン

【はじめに】

日常的に、健康診断や一般血液検査時にアルカリフォスファターゼ（以下ALP）のみが高値である症例に遭遇することがある。これら症例に対して、種々の検査を実施した結果、病因を解明することができず診断・治療に苦慮することが多い。今回、我々は、脂質代謝異常を伴う高度ALP血症を呈した犬4例に対して、肝内微細胆管胆汁鬱滞と仮診断し、脂質代謝改善治療を行い、良好な成績を得られたので報告する。

【症例】

	犬種	パターン	TG	T-CHO	ALP	治療後ALP
症例1	ミニチュアダックス	インスリン抵抗性	196	289	4105	1942
症例2	トイプードル	インスリン抵抗性	295	180	6292	4824
症例3	ミニチュアピンシャー	インスリン抵抗性	933	255	581	416
症例4	ボメラニアン	LDL増加型	50	440	3500<	1874

【考察】

今回の高ALP血症に対する治療の目的は、脂質代謝改善治療であった。その治療に伴い、すべての症例でALPの低下が得られた。脂質代謝異常に伴い、ALPが高値となるメカニズムは未だ明らかにされていないが、治療に対する反応から以下のような仮説を立てることができる。すなわち、血中遊離脂肪酸の増加や様々な原因によるリポ蛋白合成阻害が起こることで、肝臓は脂肪肝を呈するようになる。肝細胞は脂肪変性やグリコーゲン変性を起こし、膨化する。それにより肝内を流れる胆管が圧迫され、胆汁や胆汁酸が肝内で鬱滞し、これにより、胆管上皮が障害を受け、ALPが上昇する。今回、報告した4例について、消化器症状など目立った症状なく、超音波検査にて胆嚢内の胆泥の貯留もなく、クッシング症候群も否定的であったため、脂質代謝障害として治療を行うこととした。結果、低脂肪食による食事療法や内科的治療のみでALPを低下させることができた。臨床症状や一般状態に異常は見られないが、脂質代謝異常が認められ、ALPのみが高値である症例の場合、脂質代謝障害として脂質代謝改善治療を導入することは、胆汁鬱滞による胆肝疾患など、今後起こりうる併発疾患を未然に防ぐための予防治療としても有効であると考えられる。